

## 「鎮魂の歌 巡礼の旅」の終わりに思うこと

唐丹希望基金代表 高館 千枝子

「鎮魂の歌 巡礼の旅」の始まりはこうです。  
2011 年 4 月、私は東日本大震災教育支援プロジェクトを立ち上げ、岩手県釜石市立唐丹小・中学校の児童・生徒の教育支援募金活動を始めました。様々な紆余曲折があったとは言え、全て克服し、多くの支援者に支えられて、今日まで続けられたということは「奇跡」としか言いようがありません。



2012 年秋、岩手県公立学校退職校長会制作「鎮魂の歌」の発表直後、この歌の普及にも取り組み、普及に尽力した方々の力によって、日本国内だけでなく海外にも広まっていきました。活動の後半を迎えた 2016 年 4 月から企画したのが、「鎮魂の歌 巡礼の旅」です。旅の目的は、「唐丹希望基金を支えていただいている方々に感謝を伝える事。」ただ、この一点の為です。簡単に送れるメールなどでは言い尽くせぬ感謝を伝えるには、発起人である私自らの足で出向き、お会いして、感謝を伝えることが本当ではないかと考えたのです。12 月 8 日、愛知県岩倉市在住伊藤順子さんが主宰する家庭文庫「えほんのもり」の訪問を最後に、「鎮魂の歌 巡礼の旅」3 年計画のいっさいを、無事、終える事ができました。この 3 年間、旅の先々では多くの方から励ましと活力をいただきました事、心から感謝を申し上げます。有難うございました。

この活動は、更なる想いを私に抱かせました。

「唐丹希望基金」は唐丹の子供へ希望を与えるだけではなく、支援者にも希望を与えたのです。私もその一人です。教員時代には感じなかった「社会との連帯と共存」「人生の灯が消える時まで関わっていききたいと思う人との出会い」を、身をもって体験することが出来たのです。「一年間なら、私にも募金活動ができるかもしれない」という浅い考えで始めた活動が、9 年間続けた事への見返りが（まだ、1 年ありますが…）、「大きな贈り物」となって、受け取ろうとしています。

約束の支援金を子供たちに届けることが出来た要因を考えると、第一は副代表 堀 泰雄さんと出会ったことです。次に、新聞各社の報道に加え、ラジオ番組でも活動の想いを伝える機会に恵まれ、多くの賛同者と出会うことが出来た事です。特に、ラジオ出演の影響は大きく、海外に住む

日本人にも私の声が届き、「唐丹希望基金」は安定期を迎えることが出来ました。その外に、もう一つ、忘れてはいけないことがあります。それは、「常に目に見えない大きな力に導かれてきた」という事です。

この「見えない力」とは何なのか？それは、今の気持ちを失うことなく、人生の旅を続けている内に、自然にわかるであろう、その時まで、唐丹の子供たちと共に生きて行きたいと思います。2020年4月以降は、「支援する者と支援を受ける子供たち」の関係は消え、ともにこの世を生きる人間同士としての関係になります。共に学び合い、調べ合い、教えあいながら、交流を保ちつつ、人として生きるべき真の姿を探しながら、人生の旅を楽しみたいものです。(2018年12月31日)

## 「東日本大震災に思いをはせる」会を開催しました

伊藤 俊彦（愛知県岩倉市）

2018年12月8日に、愛知県岩倉市にある私設図書館「えほんのもり」で、岩倉市教育委員会のご後援のもと、「東日本大震災に思いをはせる」会を開催しました。

まず、「えほんのもり」を代表して伊藤俊彦が挨拶を行い、この3月に妻とともに岩手県釜石市にある唐丹小・中学校を訪れ、中学校の卒業式に出席したことを紹介しました。卒業



式終了後に控室で高舘千枝子さんの心づくしのお弁当をいただき、談笑していたとき、卒業生たちが担任の先生に伴われて訪問してくれました。そうして、ひとりずつ挨拶してくれたのですが、涙ぐんで言葉につまる生徒さんもいて、彼らが震災によって被った苦しみや悲しみ、震災後に彼らが過ごしてきた時間、さらには将来への意気込みなどが思われて深い感動を覚え、微力でも力になればと思ったことをお話ししました。

ところで、この会を開催したきっかけは、そのときに高舘さんから「鎮魂の歌 巡礼の旅」を「えほんのもり」で開きたいというお申し出をいただいたからです。「えほんのもり」では以前から唐丹希望基金の活動に関わってきたご縁もあり、喜んでお受けすることになりました。

最初に報告していただいた堀泰雄さんは同基金の副代表であり、高舘さんとともに被災・児童生徒の支援を続けておられます。堀さんはまた、日本エスぺラント協会や世界エスぺラント協会の理事を務めた世界的に著名なエスぺランチストです。被災地を80回近くも訪れ、被災地の状況を日本語はもとより、エスぺラントを駆使して世界に発信し続けておられ、それらはまたさらに各国語に翻訳されて、多くの人々に読まれています。今回、堀さんには、震災直後と現在の写真を多数示しながら、現地報告、復興の状況をお話いただきました。

その後、はそうの合奏で、高舘さんの歌に合わせて「東日本大震災犠牲者に捧げる 鎮魂の歌」を参加者全員で合唱しました。

次いで、高舘さんがお話をされ、支援活動のなかでどんなことを感じたか、ご自身の生き方が活動を通してどう変わってきたかなどについて語ってくださいました。そうして、2020年に唐丹小・中学校の全児童・生徒に支援金を渡すまでがんばるとともに、それ以降も見守っていきたくないと決意を語られました。

冷え込みが厳しい日でしたが、総勢36名の参加者で狭い会場はいっぱいになりました。東日本大震災の発生から7年余が経過し、だんだん関心が薄れてゆくなかで、おふたりの粘り強い活動の報告は参加者に大きな感銘を与えたことと思います。今回も募金箱を上がり口に置いて協力をお願いしたところ、みなさんから多額の募金をいただき、感謝にたえません。

開催に先立ち、高舘さんには岩手県から、堀さんには群馬県から、また、基金の活動に精力的に関わっておられる山川節子さんには東京からそれぞれ駆けつけていただき、東日本大震災について、また、ご自身の生き方についての会話を通して、生きる力を与えてくださったことを感謝申し上げます。

なお、最後になりましたが、「えほんのもり」では、12月2日から9日まで、「えほんのもりの展覧会」を行っており、その準備・運営に忙殺されて、何かと行き届かぬ点がありましたことをお詫び申し上げます。





## 「東日本大震災に思いをはせる」会に参加して

蔵本晴之・百合子（大分県）

今回初めて、この会に参加させていただきました。

思い起こせば、東日本大震災が発生したのは、子供が大学を卒業したので引っ越しのために東京に行った日のことでした。荷物を運ぶために借りたレンタカーで中央自動車道を走っている最中に、多数のパトカー、救急車や自衛隊の災害救助車両を目にしました。東京に到着するまで、何が起きたのだろうか二人で話していました。東京に着いて



初めて子供から大震災が発生したと聞き、ネットに流れるニュースをみてびっくりしました。引っ越しが終わって東京からの帰りには、多数のガソリンスタンドが売り切れの看板を出していて、名古屋に帰ることができるのだろうか心配しました。

そんなことが思い出されますが、しかし、その後の震災への支援といえば、職場での募金に尽きたただけでした。それ以降はニュースを聞き流す程度で、震災を忘れていたと言われても仕方ありません。

そんな私にとって、今回はこの会に参加させていただき、貴重な体験ができたことを感謝申し上げます。震災後も何年にもわたって支援を続けている方々がおられることを知り、そのご苦労に頭が下がる思いをしました。被災された方々が、被災前の生活以上のものを一日でも早く手に入れられることを改めて願わずにはられません。そして何にもまして、被災児童・生徒さんたちががんばっておられることを知り、心強いものを感じました。

会での説明も、写真を使用して分かりやすく、とりわけ実際に現地に行って来られた方々の言葉を直接聞くことができ、現地の状況を実感することができました。

これからも、ささやかではありますが支援を続けさせていただきたいと思います。そして、被災児童・生徒さんたちが学業に専念され、社会に出られたあとは日本を背負う人になってほしいと願っております。

## 鎮魂の歌 巡礼の旅—岩倉交流に参加して

森田 操三（愛知県在住）

2018年12月8日、「鎮魂の歌 巡礼の旅」の最後のプログラムとなる岩倉市でのイベントに参加しました。これは、地元愛知県での開催なので地元在住の私としてはこの機会にこそ役に立ちたいと思いました。鎮魂の歌と一緒に歌ってくださる方や伴奏の楽器を演奏してくださる方などこれという方に参加を働きかけましたがそれぞれ事情があり私一人の参加に



なりました。当日はどういう方が参加されどういふ会になるのか予想がつかず心配しながら会に臨みました。

しかし心配は全くの杞憂でした。会は大成功でした。堀さまと高館さんが絶妙のコンビで会を運び、お二人が強い絆で結びついていることが分かりました。また、このお二人と伊藤ご夫妻の間に新しい強い絆が出来ていることもわかりました。会では堀さんが写真を多数使いながら被災都市の震災直後と復興の状況を説明されました。次いで高館さんがお話をされ、支援活動のなかでご自身の生き方がどう変わってきたか、2020年に唐丹小・中学校の全児童・生徒に支援金を渡すというこれまでの目標を超えて、それ以降も見守っていくという新たな決意を語られました。鎮魂の歌は、堀さんの鼻笛（堀さまの多才ぶりにはびっくり）の伴奏をバックに高館さんの歌声が響き、それに合わせて全員で合唱しました。私もやっと音がでるようになったハソウを鳴らしました。会場は伊藤さんご夫妻の「えほんのもり」の活動をとおしての若い方や世界的なエスペランチストである堀さんのエスペラン仲間の方など多様な方々でいっぱいになりました。

東日本大震災も発生から7年余を経過して風化しつつある中、岩手、東京、愛知、大分など各地の志の高い方々が繋がっているのだと感銘を受けました。

私も自分の出来る範囲は限られていますが、出来る範囲でこれからも高館さんの活動に関わっていこうと改めて思いました。